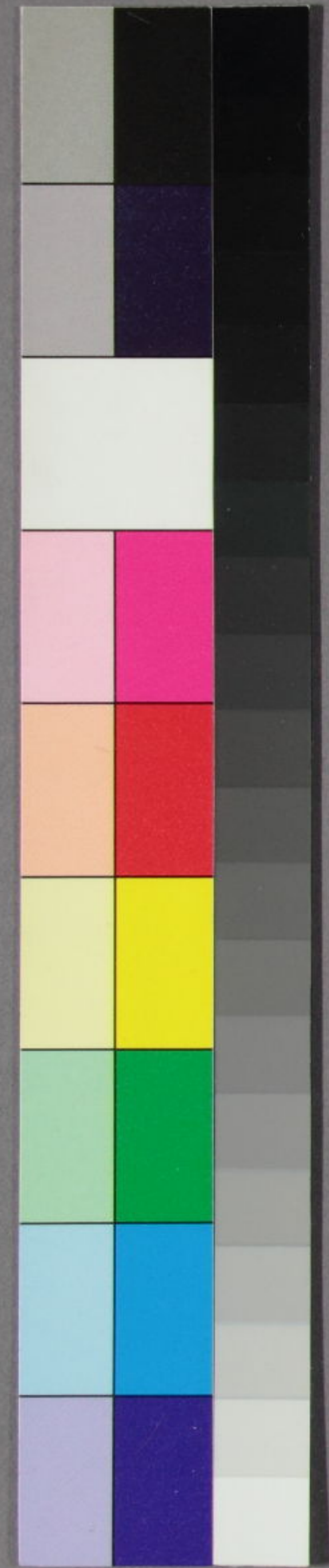


燕石
十種
俗耳鼓吹

三輯
參

679
23



持
679
23

俗耳鼓吹序



からうの鼓吹をい俗耳鼓吹はもとよりあらず
 一ツさうのたなまら多敷小梅子を望んでみ
 多敷もや吹まら一う舞を踊る人
 常よい何ぬあみう聲ふ鳴がかく何つま
 た後まらしいはく多敷まらあのかうまら
 つけぬまはかの大ある聲の里人の耳より利
 うさうするまらしい何とてあん俗耳鼓吹
 といひゆもかたうもや

天明八のうらな月

吾花園

○古今の事を消金として時代遠いものもあるをたのむをま持といふ
 是を飛渡といふる能楽の家近の始まる事と我青持と飛渡の
 号あり 飛渡の巻を牛
島弘福寺

○俄と茶番とを似て非あるもの也俄と大坂より始る今曾我を
 役者のする是俄ありナシと同一にして思ひ付の事をいふ是あり
 茶番は江戸の戯場より起るとと樂屋の三階より茶番よりい
 役者といふの之を思ひ付く茶番といふをいふを茶番といふ
 いふよりいふとなす今の戯場ふたなり獨狂言の身ぶり
 ありてその思ひ付よりいふ茶番を出すを茶番といふあり今も
 ら都下小坂也 大坂板は古今俄と
いふのあり俄の事を起す
 ○元禄の頃の板めて月次の遊といふる繪本あり「菱川吉富画之
 中ふき居の顔とせの事をあつてつゝんせといふり
 ○秋舞妓の役者の異名ある事といふあり「近頃よりいふり

甚多し二条判吉吉富などある人よくありりその外もありりや
 中ももといふ

親玉 二代目 市川海老蔵 小玉 三代目 市川團十郎 顔 三郎 篠塚園右衛門
 了海 三郎 松本又五郎 松本 山平次郎三
 程ありしは是もゆき伏葉加賀掾僧正の類あらん
 ○塚越茶湯 三三 と程言の作小老といふもの也下とせ森田座の顔見世
 の名類ふ

柏木の衣紋坂 背替 テ月モ 吉原
 梅津の掃部宿

といふる柏木梅津の對砵程持の名對といふなり世年 明和八
年外 吉原
 火災ありて書信由來し頃あれは世月替といふるありし
 彌茶湯といふて他も程言の名類ふを名月色人といふりこの程言
 よりして茶湯の地かと云ふといふ名とさぬるといふる織語

よや今月と吉原と云ふを祝ひ遊せしむる事あり

○通鑑玄宗記小民間歌之曰生男向喜女向悲居今者女作門相門

門似楯而撐狂言女能撐柱門戸也今の人云く先て女子を生むを賀して門ト開キト

いふは似たり

○平河川で風雪の船が遠にありて最明寺雪の版を痛讀とる

奉一過た太沖が招隠の詩かかるといふ多し

○浮瑠璃作者紀海音の狂歌師油煙高齋を貞柳が中なりと

稿を左東作の語あり

按油煙高齋狂歌集置土産の序小愚中紀海音堂貞我とあり

紀海音が作小書梅樵食盛といふありおちよまき清の元祖ある

座一おちよまき清の名を忌ふやお長ま平とありて板の

おふうのよ一ある松不見申故ふ末の方この語一おちよと

ありてお長と申さぬはもろく見えたり

中二段目小ま平が濱松へ行く一留まふ女房お長を妬がさ
り一をお長がかわい半を痛も同意と心得途中よま平よ
いひうらむと云ふ妙也

あうとあだのさりあふとさうふらひはさうんりあんらうとさる

何ゆゑを男の顔をたのしみふらうとを女房の口物と云ひき

さそあるまのうを亂れあふあるあとのきあふをたてあられ

ともさのみ人をあつらふまひりしてあひがかひをふおもつらん

ごどぬいままら書あつらふまひりしてあひがかひをふおもつらん

おくらうとほむさあつらふまひりしてあひがかひをふおもつらん

あふのこむらあつらふまひりしてあひがかひをふおもつらん

○白を書事をかきおつとる老涙の聲色青
く未小七糸を清うことば見合ふべ

○きりぎりすいよぬまも又ゆ也

世もこの字始終ふ照應あり世不_レ鴻糸のくけぢ
そのふまごんで追ふのかゝる不ありこれ世もこの
字小眼をつくべし世不_レ姑のことなきを書ぬべき也
見念べし

同不_レ長が詞

世世の縁さうはくとも未_レ未_レをたづくと
自の_レこゝろ_レを_レむ_レむ_レと斗_レ平_レを_レ志_レ
見_レり_レ目_レの_レ恨_レと_レ二_レ深_レ川_レを_レら_レる_レを_レ
涙_レあ_レる_レ深_レ情_レ始_レ多_レ言_レを_レふ_レ及_レす_レ也

世_レ不_レ姑のことなき

く_レを_レ出_レ松_レよ_レい_レと_レぬ_レを_レう_レす_レ右_レ集_レの_レ及_レ半_レ集_レの_レ
を_レ佛_レ松_レめ_レう_レとの_レ中_レい_レち_レん_レい_レあ_レい_レは_レぬ_レお_レ茶_レの

極子よん丸の嫁子あしてを奴合ふ世らつきの
内めてまゝをもたうやなうぬ身でもごめん小
袖をかぎとるのくしてかきんばるふふれずらうら
お寺れまかきく百目の銀をを縁あり又あてやらの
くをさく_レ名_レか_レぶ_レと_レ程_レ法_レと_レあ_レく_レを_レま_レの_レ道_レ中
を_レ極_レよ_レせ_レい_レ不_レを_レ八_レ文_レ字_レを_レあ_レら_レあ_レり_レれ_レま_レ物
を_レあ_レつ_レぶ_レん_レあ_レく_レふ_レあ_レる_レ上_レ集_レ

世姑がいふことなきをまかいうけねと見てもよ
どまごといふ_レり_レを_レめ_レの_レお_レま_レの_レ目_レう_レも_レ契
兜_レの_レち_レの_レま_レを_レあ_レれ_レど_レま_レる_レ後_レあ_レれ_レが_レあ_レう_レと_レ免
の_レ丸_レで_レま_レ程_レとも_レい_レひ_レが_レし

七_レま_レ出_レよ_レら_レう_レり_レ中_レ集_レご_レあ_レは_レあ_レり_レも_レを_レ極_レふ_レ
い_レ事_レ斗_レの_レま_レら_レぬ_レお_レで_レ身_レ共_レの_レ嫁_レを_レ随_レ分_レと_レ世_レ伴

とよきものなりしも八文字のふきねとも一文字を
ふひつのははも又きのうと一書

一文字をふひつぬとの書のしつうに徳の国を
明けてあるとのお長がふをかく事ふ對して
いり細い

右の通のふはつき文章の照應一かきつるふ違つるを後世の
作者もつた文版ありやめつ
及のうちにお長が半が辭世をたせり

とつと濱松風ふりまんと流るるむざんぶの聲半半
いふを捨てるや義理もあすま一朽ても消ぬ名をせかゝるを長

○松葉屋瀨川をまじ檢校がうけおせしより後天明三年寅四月朔日
也一瀨川也まじり

竹村蒸籠自分明

松葉屋中第一名

檢校昔時金已没

瀨川今日水猶清

松むやのちりうせぬ名をつきあや瀨川のふにせい
ろうの心とあんはまこみゆり

同三年秋瀨川紙後を代のりうけおせしより千八百
とて贖しといふ

同日辰年四月朔日瀨川也まじ
天明八年三月瀨川出サレまは松本公子文章高也又百也といふ

○をまひ谷風梳そ助とに身身のうけ

かつうしとひとたびもまきく事たう後まはる八幡の社内
あてまひありし付山神川雲霧ふりしめてまけしり時ふ
天明二年寅二月廿八日あり

る練せしふ瓜とろろがわの川やうと車のうとい聲 菅江

谷風をまげつと山能川がわつをより福のふんりゆ結 赤良

○月一年やふひつら此日祝の赤文筆又凌あど洲寄の目とりを
道遠し修りし秋葉のまやかの目小様をつあぎあきつらめり
お垣ひまりしれを多そりよそそみまば「様の通へよまぶ」
すとつりまろいをまどのふちよりていひあどして怪我らやま
もやありし耐親のむつりいひらんふりてうられをや書きて
直らんいつおしうらま

むとひ洲の寄の望院欄よと酒ふまひておかくとて硯のたふありん
をあすすあきまそめれいりしし祝のふいとあしうてざれとを
くそそをせゆりま

白雲の柄袋の縁ふあしす

赤良の硯ハ石のりしす

○いつぞや口谷迄めて三國志を鑑りし鎌原のあま白門ふれをまき

今日より孔明也

花若八幡の草巻山麓ふ天転てや心を用とりしれまらま

○小便を用車を用等のれいふあれんとひとせ牛の御茶の堂のよ
おしきれを多そかり堂の上して益定味を用とありそのまびき
是れおしきまらま

又牛込改代所の路傍ながらくをくべうんもかうしうく
と六骨董也

寛政二年八月朔日より築土明神八百又播幸忌平親王将門
御玉首やといれもかうし

○浪花の一本亭芙蓉花を粧秋ふ名ありあしし任あづまにりりて後ま
親世音の堂ふ一の繪馬をさくく自ら宝珠を忌むとわらうし小粧を
まらり

畢竟是陰

○ 近松戲文評

惜農子著

△ 曾根心仲

徳義傳

上卷

徳義傳縁のりふ思ひ居お初是めて喉をなげす不妙也可断腸

十卷

道の箱一何一げいふきくくはく後のゆめこそろれるまらまき

がそれどうの境の七ツのときが六ツありてのころ一ツあんぢあうのり
ぬのひどきのさうあさの寂滅為樂といひく也

裡來先生云近松が妙文は中あり外は是めて推すべしと云

仇吳忠脚名は惠字の話也

摩訶訶十夜ニ云

一 曾根濟心中の道乃の中ふ何〜と〜と死小乃身の道の
箱一はげく消て何と云不道作〜が云系をて心た〜をいふ
と業〜を〜するそは仔細の涼菟撰ふあり合けねるを後びい

して取續らんや由脚を去〜と投うけ〜り菟叟ゆあ〜が〜介の
心〜酒の〜お〜て笑ひ遊び門を思ひ〜もらふす〜たのり
少〜更何や〜や雜談〜あ〜ら夏の田のあを〜う〜と〜も
や〜と〜と〜と近松ふ思ひや〜て作り入〜と也まことふ詞傳の
そ〜〜んふいと佳く轉〜〜文體を〜〜と〜て何縁の〜や
やも取法でげやとさえ取決不生後の文法涼菟ハ音笑の作者

明和二乙酉年八月板

右ハ古素堂五十周忌追善之俳書

右 小石川 紅ノ末自書

△ 姫山姥

五百番之内

全篇ハ頼光ノ遠巡退避ヲ以文ヲナス

第一段 惜ラクハ敵ヲウツ〜早シ

第二段 姫ノ奥へ入トヨ散シノ妙ヲ得タリ不如此則山姥トナル〜

アタハス

○中庄押上村長行山火雲寺小古き石塔あり

寛文十二子年

寶安林清信士

中村長十郎

十二歳

○
此世とんほりてあり
今此七三郎が紋
也その先祖を

十月廿五日

寛政十年己未九月一日火雲寺へ立寄見ると此墓あり

此寺小役者の墓多し一瀬川為末之忠代々の墓あり

亦女くも瀬名氏ノ役者墓詣ふんくもり

寛延二九月二日

圓學院即譽源阿是空居士

初代菊之丞ナリ

寶曆六閏十一月十三日

功德院淵譽水阿仙魚居士

菊次郎ナリ

寶永二閏三月十三日

正覺院響譽十阿方順居士

王子路考ナリ

○原富又市後称表徳を原富三線小堪能なる人ありたりいつの年かて
やろりらん市谷長流寺市谷袋寺町一高家が尺八
をたのせて道成寺の曲をあせしふじしも秋の末ありしが空ふいふ
くもりて雨ふるところとあはば座ふりあり人々その妙を感嘆し
けきば原富笑してかゝる三線を遙聲あてて雅樂ふあらず道成寺の

是古代なるものきぬこゝに傳へ秋夜ありて平調のこゝにけふ
おひてを金をつらきとる律をうあゝむ聲ふ座をさればを心を
とつて彈すべきをこゝにやうふるをいゝ事ふありのさなるも
さほ極のあふ事このそ是へいゝ大あるあやまり名づけてこ
ぬことあり心をつゝる唐大和ともふきぬのさゝる感
情のそのなきを也

又いゝく近世かゝるゝ長調といふる事味有とあるふ
そのけもさだまゝにいゝ長調といふる事とや

古歌小

月影掃衣

小歌のこゝろの喜さひ秋風
更け袖のさやあくらん

長調

表さうし程更長き程秋の月
恨さう衣うららん

為家

よ代をささぐ衣をくりさの
さゆるさ月さう川

為遠

右總彈才并七段獅子秘曲傳授せし名也

長井 玄助

金子氏世登女

膳原氏脱女

多田氏多女

西川 徳彦

うきや惣次

佐々木市彦

杵屋 佐次郎

世外窓を付自筆し送りせし名也

親世古新九郎

市村 卯九郎

尾上菊又郎

心彦源日郎

心彦百次

高橋 孫九郎

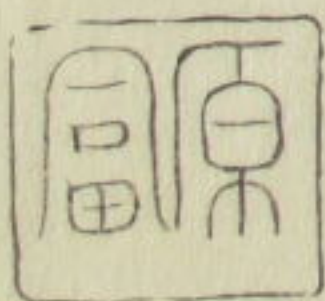
小松屋三左郎

安永元辰十二月

原

武吉丈

盛和



○松江老彦 出羽の隠居也 葬送を天明二年十月十三日也 寺天徳寺小築るる
名の法彦也 過く見物多し 臨り杯あり

墓所石蔵ふ十六羅漢あり 栄川興佐の卜画也 メケリ小橋をうり
又退筆塚あり

○すへて京師士老夫の家受吊の事 あり事小盲人多く来り 施物を
うり也 然に付 所ふ事あり 且に付 けり事あり 且にその盲人 龍田廻
徳馬町廻とて二廻あり

○るまんいつりたりと 枕灯ふ書 ありいり人の在女 奥列をうけ
あしと張れせし 今此漢 秋馬谷あり

○みまんあり 芝居三階の階の名かけ 福あり 現金これあり
○友泉深といふあり 友泉を繪師也 是が書 所をうり 且に深くあり
尤も繪あり 且に有友泉を祇園町少佐とと 沾涼か 世事終り
見たり 扱あり 貞享板友縁あり 且に巻有 序ふ宮崎氏友縁と

いふ人有て繪ふたり みたる事いふ事あり 古風のいやし ぬき
とて今松の番車 キヤビヤ あり 物数あり ありあり

○世頂神の名とて人の見せしをみれを
ままい色 ままい白 白黒ぶち

目黒 鼻黒 赤ぶち 栗ぶち
かぶり ひど毛 耳の太耳 ぶちぶち

毛ぶが 毛づばり
當せハ 地ひくの毛長
流りし

上田より 沼市より 小田より
大嶋より

○天明二年己八月廿五日 六代目 市村羽左衛門家橋死
致興院讓譽保壽居士 寺ハ本庄押上 大雲寺

○同年彰見せり 中村仲茂 六代目 中心小十郎と名を改む 是ハ仲茂

養親してことの外世絶ふあり——その名也といふ歌うしひの家也
古歌ふ

中村の早押をききや江戸げん——やうりの志賀ふ歌い中心志賀ふ
の江戸一流をいひて中村生島ふりの三ヶ本

あれは古市村家橋を妻は花園に結く——といふ志賀ふの家いふ
りの家也元禄二年の板つて年子武正橋古本といふそのあまを
家よ花めをり志賀ふ弟地解まい子の道が舟子の名并唱歌をのせり

寛政二庚戌年夏中村仲花死

○天明のとり七月十日は江藤幸藤枝外紀といふ人新吾系といふ
やや家といふ社女と田圃ふまの解まきの家まで心中せふ藤枝
み千石を願もる家あれはその次吉系といふ歌ふ
君と福やうみふ石ころあんれみふ石君と福よう
といふを三味線ふあをせうしひ奥——りりふたはふれふ古樂府

のうらうらをうけす

羽林衛藤枝氏與北里菱家倡綾衣狎親戚諫之將出
藤枝氏十一室藤枝氏至菱家携妓入所識農家共
死里人哀之作斯歌

寧與君同寢將守五千石徒見五千石不如一歡夕

鳥亭焉馬云夫より茶ふある歌ありともウラウ

平按訂府簿

知りとりひ書留

一 高入千石 宝暦元年 下総下野 安房

一 高入千石 天明二年 武尾相模

高入千石 天明二年 武尾相模

文化十一年甲戌七夕後日記

○文流といふ節と文流といひ——座の三味線ふ流をまといふと

○ 夕ぐれ枕のあいおひもまろとあはれぬきぬふ枕をとりてよ
この瓜残るひとりのおとけをこやのおさしとありふろを 簞埦め

鶴のうしろ袖

○ 男をみづぐりむらげ心のちくのいさかきもさや秋風のそく
さぎぬぬぐりむらぐりの志を片ひよりのけぬきとりい
うぎのよくさき

さくふむとよのゆり者たちを松とうきちしは尻が筆の
のけさきのまきさぬやらあしーいあら

水と蝶の羽番

○ なまもあはれぬを眼ぐ目のおづれふそく川井のちき
きこひふさこしとさしらすのねのりちりてあつとんと

福どりめれ一二三 曲調如流

○ ろのとやろりりこともてうとてうふおぬのこく紋と信

福ふぬらせと膝をせしひよりのまきさくちのさしなむ
ろりりひづみちやんとあげぬのまきさくち

○ これとてうのお将のよるさるんどもひるんせぬきさきい
おぼろよのほきむー女帝さるまらりちりの田んぼ
ぬき風流ありろり次也

帯貴おとこ鑑

○ ちいひであてうそれあ替いとまやを多巻とわらういさのやま
織の板折やうあるまろひろ帯二重あがらむんぞと取らん
すまふうぶうばあ替あんさんぶふりまきもる大だんぢやの
ごちくあり中畧時むもむしはちりの大ぢこらむけとも
あせどもあさづきさよまやぬけのころあめさくくのま
しとつまきまひまい枯木のちうさぬまきしとあつたまき
の石ふたりのあれくまのあふ様のさきさづらうしと綿が

さつて八子をめくみ付するありさゆを身の色もふぶの斗り
あり

社文長恨奇ヲ模擬ス意ヲトリテ文ヲトラヌアリ文ヲトリテ

唐團扇

意ヲトラヌアリ其文ノ所ハナニ抄出ス○ヲ印トス錯紛

ノ妙言外ニアリ

扇。ん。や。う。の。ほ。り。あ。う。上。の。秋。秋。風。客。を。送。つ。て。一。葉。か。ら。く。り
は。を。ま。ら。ぬ。船。の。う。ち。酒。を。ま。り。光。て。白。居。易。ハ。月。ふ。う。そ。ぶ。く。ら。ま。の
系。八。重。の。あ。わ。ぢ。の。末。遠。く。み。さ。さ。の。外。も。ら。ほ。ち。り。て。氷。の。ま。ど
み。も。ふ。う。き。ね。や。ま。ぎ。ハ。此。霧。の。た。い。ほ。り。あ。ひ。下。と。ゆ。ら。い。り
火。此。ほ。の。う。ち。そ。り。こ。ほ。の。う。ち。浦。ふ。き。か。ら。い。秋。風。の。う。ち。を。ふ
それ。と。び。こ。の。縁。が。お。ほ。つ。つ。な。う。の。あ。う。ご。う。も。扇。ん。一。せ。ん。ま。ん
ば。と。も。ふ。う。き。み。を。ほ。る。ま。ん。ふ。ぶ。ら。ぬ。め。れ。浦。の。あ。は。お。あ。い。あ。る
風。ふ。う。き。定。り。ん。扇。ん。あ。ぞ。り。居。て。あ。も。あ。ひ。秋。の。哀。も。身。ふ

あ。み。て。袖。の。ほ。の。お。も。ろ。く。ず。こ。ま。や。と。同。ふ。も。浪。の。上。こ。こ。ら。み
を。人。も。た。り。か。も。光。び。と。聲。や。ん。で。お。と。も。せ。ず。扇。ん。あ。き。後。の
う。つ。あ。く。千。こ。急。よ。び。う。聲。や。ん。船。の。月。扇。ん。と。ま。れ。と。り
あ。め。さ。や。り。き。月。の。色。り。を。て。こ。ほ。ふ。く。け。の。花。を。き。き。不。の。光。り。袖
ふ。あ。ら。う。る。扇。ん。あ。き。天。の。葉。を。や。ら。げ。い。う。で。か。く。波。ふ。う。き。福。の
船。よ。せ。て。あ。く。あ。る。む。さ。の。い。と。あ。ひ。お。が。つ。う。な。い。さ。う。つ。て。も
お。身。い。い。ら。あ。る。水。事。ぞ。扇。ん。の。か。る。波。の。ま。の。り。み。ぶ。れ。う。き。こ。こ
の。葉。も。あ。ら。う。い。と。の。び。と。波。い。ぶ。き。と。お。も。さ。ゆ。く。あ。う。ぞ。か。く。せ。
う。ち。を。せ。ハ。舟。月。の。あ。ら。う。さ。さ。ざ。ら。や。木。の。る。の。さ。れ。あ。ら。う。り
お。た。れ。ぐ。み。を。そ。の。ま。れ。を。さ。も。よ。う。や。ふ。く。う。ら。ず。扇。ん。樂。天。い
と。ど。あ。や。ら。て。あ。れ。の。む。ら。れ。波。枕。う。ら。福。の。ま。を。う。ら。み。を
い。ぶ。う。ら。さ。よ。と。い。い。た。れ。バ。ら。あ。の。色。ふ。そ。む。て。心。吹。め。花。も
う。ぶ。あ。ら。う。の。む。ら。か。ら。る。も。さ。す。か。ら。う。の。も。り。て。う。き。せ。の

ふ今ゆかかふるさかちむう〜ふうくも花の袖都の春もらぶ
夏とおひら〜とげふはことこのし〜ういんら〜のあひあ〜り
〜の〜と〜^{ヒテ}〜ん〜の〜の葉ふる〜ぬまは〜らまあな
あざりの袖びび〜り〜い〜かきあ〜しは〜と〜あ〜雨つ〜と〜ど
ぬより〜び〜て〜る玉水の音ふせ〜川やあ〜れもあ〜をせ
こめて〜ちま〜さ〜る銀〜いぬ〜ほど〜〜き〜も是返あり
と夕志ほれさ〜して〜のあ〜も〜こ〜び〜り〜ぬ〜船のあ〜と月
どあ〜ふ〜み〜の袖あ〜ほ〜ぬ人あ〜形〜り〜を

此文マコトニ一唱三嘆ト云ベレ因テ全文ヲ載ス
白氏カ琵琶行ヲウツシテ斧斲金ノ痕ナシ本文ト離レテ合ニ
合テ離ル何等ノ筆カゾヤ
意ハ琵琶行ノ詩ヲ主トメ調ハ謠曲ノ趣ヲ得タリ
狂女草枕

○おさほよふ身をけちが系人をおもひのまうまてし先かばり
ハ者あ〜け〜は〜あ〜け〜おもわげさ〜せぬわこの〜
よりふよりもあ〜い〜お〜と子のおも〜い〜せい〜あ〜ん

角田川船の月

○くつらが千年さて後一びを覚る角田川〜田ふ〜ら
水の玉わ〜るぬり〜を〜の〜の〜船の〜〜返ゆふ
そめるみ〜の〜君ふ〜むと〜く〜や 後みか〜り
○あの多佛ふついで日本ふ〜れあ〜れぬをか〜してさ〜せ
さん紙あ〜〜して〜く〜涙がやがて出ま〜とさ〜の志
くぞさ〜め〜

○ひてりの様色さ先て心〜りのあ〜ともは〜の〜とを
さ先さけ〜金〜も聲耳の出をあ〜ふ〜んありとも〜し〜
さの祢聲耳

○梅でちり色をぬぬうらひまの梅であつたがさし—さかけぬ 春情可留

心かざし

○ふりりぐ申のちりるよむすびもさけぬひらき帯つせ—ままのうらかけしていつりあしぬとまのやま

待宵

○まぶれちりるよまれば露きゆのちりひらきつらまかぬさし—
らしき—ときせららぬてふまらよの月をさぶれくやどかりて
ぬれてひろゆもかき置をさし—はりの雲もあき月見の袖れ
まをせりや

○わんかゆりくばうりれやどと先はさぬ—やとらぬのつらあといふる
名のこぞとほくむことなよいみ—さるあちも思ひのます鏡

袖若葉

あけがのもむ—うれとさほく—さぬゆらさき—かき—のわか

袖のふゆひもわかやふそらうしそがごどふ—かぬ

うらあもく—とほけうら—そのわね 春情

雪回

○あきつ—い—ふ—入帯いむ—のほなき白む—のむあがねを
あそびはれきか多先ぬ—た夜でのほむともき露—とくか
みさきのゆもく—もゆきのるをかき—つ—ま—もま—
にあつて—せむ田子のうちよた—い—きの波らちよせと
枕のふきぬいそあつ—と—く—あそめふ月のうげ—と道—ご—
—さ—のむま—^穀—^春—をむげ—ふ—のさ

○よひらる雨をらさ—れがき—さく—ぬ袖の—あ—
をちます心おろ—

袖—う—み

○かさせいで柳を袖乃ふりほ—
そ—
かき—い—ど柳を袖乃ふりほ—
そ—

どいしとすまのりあのをとらんみそ
ちよひとよぶがふんてちのち
さたきほをまきくみまきいりらの月
かいろまじひをてあつらふも
えようのんちやうさわくこよあひの
身をまぢりりの数をそまひ
さひとのれまんをふいて折しあり
死傷もあむさうせぬふ
ますれんまこつなふうくり
こくもむすぶもおあー言

世曲祿階の句を以て一世トスめく

即六後日道行

はまぐさあぢのこくと川あさうづきい急ひもせず京のよー田の
神懐ふうぬぐーもせぬうづぐさいやほん神ううのちんくま
のまふ神さむさう〜みくこち〜こがめめて今休る今の方の
ちぢをさう〜ありてのこち〜より松の位とそやさん〜ま
まあう〜まぬ〜極れはまといりり〜まのござん七十ぬるま
せでかくあるやあよめ入るまぐせい〜ある因果ととあり

ふつ〜み〜あきはをのま〜もふちみやあづむらん

世曲使ノ氣象今ミルガゴトシテ願ノ當世文ナレヘ

景清道行

○このあ〜ばつ花もさきあんらんせり クヒゼニ ぬちあるを

蟬丸道行

○やありてまれよれんううのいさをぐ〜ひてを盗賊のおそれあり
は衣を脱つてその瓜まわらせぬ〜「是ハ雨よ〜田その鷹
と泳ぎ〜このう〜又雨あつぬのい〜あれば月〜〜笠をま〜
「是ハ〜さうらひ〜うきとよみ〜お〜あ〜」又この枝ハ道
ち〜金ハ〜ふ〜と〜せ〜終〜べ〜「ば〜〜これもつ〜〜ふ
とせの坂をもち〜あむとかのいんせうがよみ〜は〜〜それい
とせのさか〜は〜〜友を〜も遠坂心

同笠の脱

○ 廿一廿二のうんきさきり〜として秋の風松をまらりつてそぬん
あつ廿三廿四の宮をこれ隠丸があ〜づもほりのあり〜あり
けるまぐれうね

かぶね万葉

○ ふる宿うらり袖のあけあけのほもやう〜とむ〜さき〜も〜初
室にまももかき服き管れま〜を〜おのがよ〜を〜あてひふた〜
〜りあり〜い〜みある〜み〜か〜る朝おそげある雲の帯

○ ちよれ敷ある沖代あ〜枝もた〜さぬうちきさ〜い〜よ世心ま
らぬ姫小松を〜縁を〜ゑんたまら〜の聲耳んおぼえ〜い〜だ
らやおとさ心の春もさ〜つ〜のせぬふ〜〜梅の香だま〜

○ ふせいあり
よ〜終〜を〜ま〜ぐ〜〜ふ〜つ〜ね〜を〜〜け〜さ〜い〜屋〜も〜ひ〜ぎ〜い〜〜き〜う〜〜き〜〜あ〜い〜
〜り〜免〜より〜さ〜や〜〜と〜い〜な〜れ〜い〜〜〜さ〜さ〜い〜う〜も〜う〜〜と〜も〜い〜

えふい〜も〜ふ〜あ〜つ〜思〜草〜の〜ふ〜えふあや思〜らん

廿曲全文トモヨロシ二ノ警言ウヲ抄出ス

狂女あ〜あま〜い

○ さかりある男ゆ〜りをせいあ〜や〜や二ツゆら〜の〜草子〜
〜このあ〜〜さ〜か〜れ〜さ〜あ〜い〜初〜お〜抱〜い〜て〜う〜ど〜お〜ある〜姫〜お〜せ〜の
十ヲより円れあり〜づれを二九や十九のや〜い〜ま〜で〜め〜をと〜も〜て〜あ〜す
う〜や〜ま〜あ〜え〜も〜お〜ま〜ず〜那〜良〜猫〜の〜心〜れ〜ゆ〜ふ〜書〜あ〜さ〜う〜も〜
大和もほか〜〜〜是〜ぼ〜ん〜あ〜う〜の〜犬〜さ〜り〜ま〜ひ〜い〜お〜れ〜あ〜の〜さ〜き〜ま〜い〜ひ
ら〜き〜を〜の〜せ〜し〜る〜の〜り〜お〜も〜さ〜り〜〜夕〜の〜あ〜い〜お〜お〜や〜それ〜より〜後〜の
お〜と〜ほ〜を〜さ〜か〜く〜福〜を〜そ〜ら〜る〜色〜も〜れ〜ゆ〜い〜〜の〜つ〜り〜き〜て
身〜の〜か〜い〜お〜け〜の〜外〜あ〜さ〜き〜あ〜う〜い〜あ〜う〜が〜ま〜ま〜ら〜げ〜う〜け〜の〜ま〜と
ふゆす〜つ〜き〜二ツ〜あ〜ら〜は〜ん〜い〜ふ〜き〜井〜も〜ん〜は〜ま〜り〜た〜も〜ら〜れ〜〜と
やつ〜を〜今〜年〜の〜あ〜〜あ〜よ〜た〜ん〜と〜み〜ぐ〜〜の〜馬〜棚〜や〜ま〜る〜を〜香

がんまのきやくけもんうう——蛤のこころを思もむいどうを直ま
いせむまぢげあや

らんはやちびふりききまのきてんてきといたけを二ツふりて
ませこもちかへるあつて遠ひうとせうらの契りいり人をま
きゆうのこうれつきあもほこきをううくうれい者

巡簷滴照似琴声

三体詩又等曲ニミヘタリ

松羅ノ契毛詩ニ出

破鏡ノ別古詩破鏡飛上天又故筆

鼓雖易云

京ろうんべ

世曲全文トモヨロシサレドコレゾトイフベキ佳句モミヘズ

いと一帯

○ほつれつとめはきりりそそ内との者ふせうんてそ文も色はずぬも
あずまうちけ嵐みはりの雨づねおもひのほまふとろうきねふ
うらや名取川

松の内

新玉の空まきこころあけほのほはまもりも若くと若水もあき
車井のめりうらうら——幸は鈴あごのまあるみづね髪こぼも
くれるこ——極をたれむとととあとけあやまどけありふり
あさごめあつげそ跡る意衣ごの袖かうらうらうらうらうらうら
まけ夕夜二日るまあふみの日あてこはこころこころまあ板少
よりつとよはくまねの世ふ——^{モスツ} 継ぐ——袖くろくもえ
ふ二ツ杖二ツ笠あうらうまうりもまそくまりが——袖くろくもえふ
あごつとらそつとらあふちよと百つとまりれ数とんとあて
いあふ——んごとの女帝流のしひもを結ぶの神のしんこてあ
う——^同まほ——二日を客のきそとら——先抱てねの目といこた
のうかりほのり——奥ぎ——き君づちひさのう——のゆやう——
とやい——んごあひひはひあんころむも——うらうらあひのあけ

源波物狂

綺羅の女姿を以てして納衣紙の身ふまはりぬ似繪今の二がふをわせ
あひて七条の女院ふまへせらる略後

由良物狂

いりく人ふあひあまを借壳同元海へず同一誓りとあひ
ふ人のむね花をよき音傳の類乃雲よ誓んかうとまじし
よりむらり心をまみよしこれ福多し人もまらといひ
かりいふふら略

横心

在京の中將二条此辰ふまひりしをいある人ふ大君ぶつけのたけ
の誓乃誓さしし料ふふせしき遠路の身こたたまふ當國の
わりて入間此郡みよりのや今川城乃心家の心ふあふふま
はるそれ秋わす麻の聲聳妻意此秋ふや又夏うりれむの

芦のくくやうりふは當座の恥辱家の恥しりり唯酒
のふてあそむん

反魂香

まきりて海もあく形も消えて流る唯烟をわりぞ反魂は香は
のふあはば那どやあふりもどまきりぬ略

秋占

命ハ水上の流風も消えてぬのぐらごら魂を心託中の鳥此字を
侍てまふあふりさゆらそのら二夜んをまよりのは童てまらぬ
中略志をくく目をふらふで性事を思へを回托留を指をわて
故人をかぞつ毛が親縁あふからぬ時うり事きて今何ぞ
渺茫たしむや人をゆり我は誰う又常あらん略地獄の苦を下り月れ夕の
浮雲を俗の世の迷ひあふ

那須

有侍張良母ふむひてりや我戰場ふまへて客の徳をたす侍ふ

茶 肥後 丹波 京都 深井

石皿 地まき 縁

菱皿 巻

磁筒 尾列 寸方

牡丹 吸物 細切 牡丹

著 角 本 又 角

銘 口 取 二色 せう

塩梅 酢

南京 漆 丹 どんぶり

車 漆 丹 縮 寸 方

琉球 大丸 盆

回 断 どんぶり

漆 丹 縮 寸 方

古 漆 丹 漆 丹 平 鉢

古 漆 丹 漆 丹 平 鉢

八幡 漆 丹 漆 丹 大 硯 芸 皿

玉 皿 漆 丹 漆 丹

赤 漆 丹 漆 丹 大 鉢 漆 丹

鯉 平 鉢

漆 丹 漆 丹 漆 丹

本 地 吸 物

鯉 平 鉢

漆 丹 漆 丹 漆 丹 漆 丹

本 地 吸 物

漆 丹 漆 丹 漆 丹

漆 丹 漆 丹 漆 丹

漆 丹 漆 丹 漆 丹

向 漆 丹 漆 丹

漆 丹 漆 丹 漆 丹

漆 丹 漆 丹 漆 丹

水部

平ひら 丸い ふも
柿せり ゆき ゆき
落おち す

香かの物もの
色うら 南味
花丸 おつ おつ
おつ おつ おつ
おつ おつ おつ

吸あ お い い

湯 い い い い

燒ま 地
物 物
箱

硬蓋

吸物

い い い い
い い い い
い い い い

木ま 角 角 角
臭く 臭 臭 臭
地ち 地 地 地
吸あ 吸 吸 吸
物ぶ 物 物 物

水向 あ あ あ あ

小粒こ 粒 粒 粒

水煮物 い 煮 煮 煮

水汁 み 汁 汁 汁

水飯

水焼物 い 焼 焼 焼

水湯 み 湯 湯 湯

水菓子 み 菓子 菓子 菓子

水吸物 み 吸 吸 吸

水肴 み 肴 肴 肴

次の紙と交換せよか

平

丸い
まきゆき
ゆき

落す

焼地

物

細

香の物

花丸
まきゆき
ゆき

吸物

硬蓋

湯

ゆき
あけ

吸物

ゆき
あけ

木奥
木地吸物

虫脂部

虫向

ゆき
あけ

虫汁

ゆき
あけ

小粒の

虫飯

虫煮物

ゆき
あけ

虫焼物

ゆき
あけ

虫湯

虫菓子

虫吸物

ゆき
あけ

虫肴

ゆき
あけ

同
こせうこも
さふり
は貝
こけ

由新
大ふか
善大らん
いせう

由茶碗
ちよき
さうきういも

由者
うごま
色白ち

一
ちよき

山川酒

一
ちよき
ちよき
ちよき

一
ちよき
ちよき
ちよき

一
ちよき
イモハ
サトイモ

过焼
ふく菜らん
赤をわり
赤らん

吸物

膳
せんえあ
菜らん
らん
らん
赤らん

南系
酢者

後飯

坪
赤らん
赤らん

膳
南系

やくと
赤らん

香の物
あき
あき

吸物
ちよき
ちよき

こん
小形
室住

白飯

菓子

おぼろあんず
おぼろまんぢう
八重あがりあん

落葉 松くそり

茶碗

あらく
古唐津
古瀬戸とりやを

りくる中 壬寅二月十六日望陀欄く布施氏夫婦子孫

招法科理骨

孟春 十六日 望陀欄

山吸物

細切の
尾
めりか

文巻

山吸物

あじろ
あじろ
いせろ

せん
せん

のり巻
さけ
せんが

山小皿

おろし大さん
このころ
飯ひたしを
田舎のほうり

山吸物

あじろ
せん
せん

コシメシ
文并クニ切リ
白クカニヤウ
如

山吸物

多ひわ
同
ゆうがし

山肴

牛の
よまん

白うを
千足

山吸物

あうこそ
とろこ
つてきえらん
福き

山夜水

山坪

今出川
とそが

山菜子

いけあり

院とり
そり
あ

山湯

山菓子

山菓子
山菓子
山菓子

御香箱 下江一坂

菓子
およちん
八重あやまん

落葉 糸く

茶碗
古唐津
古瀬戸より

何くる中一 壬寅二月十六日 望陀欄く 布施氏 夫の

招法科 狸骨
盆春 十六日 望陀欄

山吸物
細切の
文巻
山吸物
おろし
せん

山小皿
おろし
せん
田舎のほう

山吸物
多し
山吸物
せん

山吸物
あつと
せん

山吸物

山坪
今出川
山菓子
せん

椀
せん

山湯
山菓子

せん

せん

此乾者

新のこくわい
長いせん
まのり
あんぬ
のり

ハカリとスル
味也

昔時あるの思ひつきて先ふ布施氏を南家の名を用ひ
て、着物も唐物を一つも用ひしと和物の名あり酒園ゆて、
出控あり布施氏去年の酒揮をいふと同作りたれば、
多て着物といひ酒味といひのさるるも、唯うらむら
一色しとてき事ありと申せしふ布施氏うらむらとて、
き今らある人あるを去年の曆を昔時の教を紙ふむら
あり

予同祝河弥以此事。祝云。白人ノ料理佳則佳矣。但恨美

○ 味累々。腹中飽満。故料理以不飽腹中不厭口中為要

○ 江戸の人一日ふ豆砂糖百六十粒を嘗るといふ是を新川大鴻と
いふ是より分出する大粒を伝ふ之杭列の人日ふ三十粒の
招小本をうるといひも同日此讀あり

○ 油一年ふ二万粒ヲ京都よりりす
天明のころのより
八年各月の二日ふり

此書南軒翁所著也然ニ碌々タル人ノ手ニ傳寫シテ誤
脱甚ト他日全本ヲ得テ再比較スヘシ

安政五年戊午四月上澣 話東子識

明治二十年次歲丁亥初夏

筆者

妻木賴德



